



「世界史探究」を考える：高等学校「世界史探究」 実践報告（二〇二二年度シンポジウム「『歴史探 究』を考える」報告要旨）

合田，和史

(Citation)

神戸大学史学年報, 39:15*-16*

(Issue Date)

2024-06

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCOI)

<https://doi.org/10.24546/0100491665>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100491665>



二〇二二年度シンポジウム『歴史探究』を考える」報告要旨

「世界史探究」を考える

―高等学校「世界史探究」実践報告―

合田 和史

神戸大学史学研究会シンポジウム『歴史探究』を考える」では、学部教員養成課程を修了し大学院において西洋中世史を専攻した報告者が、高等学校「世界史探究」の授業の実践を通じて分析した現状および今後の展望を報告した。

二〇二二年度より開始された新学習指導要領において、従来の「世界史B」を発展・深化する形で新設された「世界史探究」は、「従前の「世界史A」、「世界史B」のねらいを発展的に継承しつつ、諸地域の歴史的特質の形成、諸地域の交流・再編、諸地域の結合・変容という構成に沿って、世界の歴史の大きな枠組みと展開について理解を深め、地球世界の課題とその展望を探究する力を養うこと」をねらいとする。さらに、「時系列」、「諸事象の推移」、「諸事象の比較」、「事象相互のつながり」、「現代世界とのつながり」等に着目し「社会的事象の歴

史的な見方・考え方」の育成も重要となる。^②

上記を踏まえつつ、実際に行った授業を紹介したい。古代文明を扱う単元の導入において、大河の存在等を共通項とする、いわゆる「四大文明論」の検討を課題として設定した。中学校の授業等による既存の知識を持つ生徒に対して、オリエントの辺境に位置し大河・大平野をもたないながら後の古代ギリシアローマの濫觴となったエーゲ地域や、大河をもたず灌漑を行わない南北アメリカについての事例を示しながら、多様な古代文明の歴史的特質の理解を目指した。地中海地域を取り巻く諸文明の学習においては、各地域および年代ごとの文明や国家の特徴を記した年表を作成した。その上で、地域横断的な事象への気付きを養うために紀元前一二〇〇年ごろに注目させると、ヒッタイトの崩壊、海の民の襲撃、ミケーネ文明の崩壊等の特徴とする「紀元前一二〇〇年の破局」と形容される大規模な社会変動の発生を視覚的に理解させることができた。史資料の活用という観点では、教科書「新詳世界史」における古代東地中海の諸民族に関する史料を活用し「バビロン捕囚」とヘブライ人の民族的アイデンティティとの関係を考察させた。こうした生徒の解答は、Google フォーム等を活用することで、採点・評価の効率化につなげ、指導と評価の一体化にかかる成

績への反映も容易化することができる。

今後の課題および展望として、以下の点が挙げられよう。すなわち、先行実施科目「歴史総合」と「世界史探究」の接続に関する問題である。報告までに扱った授業内容は前近代史を通史的に扱っており、近現代の歴史を対象とする歴史総合との有機的連関を図ることが課題となった。今後、世界システム論などの議論を活用しながら、地域・時代を包括的に俯瞰する視座を身に着けることが望まれる。また探究学習では、歴史資料の活用が期待され、「新詳世界史」においても様々な史料が紹介される。一方でこうした史料の授業における取り扱い、授業者によって多様である可能性があり、学術的研究の裏付けなき授業が展開される恐れもある。高等学校歴史教育と歴史研究の相互作用の促進が待たれる。

新たに始まった「世界史探究」の授業は、試行錯誤を重ねながら進行中であり、今後も多様な授業者による様々な実践・研究が展開されよう。こうした経験の蓄積による歴史教育の一層の発展および深化が望まれる。

註

(1) 平成三〇年告示『高等学校学習指導要領解説地理歴史編』二七一頁。

(2) 同、二七三頁。